

1

ウ
I
エ
II
ア
III
ウ
3
I
決め

II
日本
独
I
創造性
II
記憶力

5
直面し
6
5・6

7
(記述題)
8
自分の頭

9
A
軽
B
イン
C
他人

10
a
極東
b
先進国
c
大半

2

1
a
遠方
b
風景
c
名案

2
A
ご
B
す
C
草
3
初対面
4
ウ

5
血
6
月に一度
7
楽
8
イ
9
才

9
(記述題)
10
カウンタ

1

7
興味のない暗記中心の勉強をさ
せる先生のいない対して、反感をいだ
いているから。

9
慣れない注文にとまどっているおばあさん
にわかりやすくやり方を示すため。

2

(同意可) (同意可)

配点	
1 9・10 2 1・2	各2点×12=24点
1 7 2 9	各6点×2=12点
その他	各4点×16=64点
100点	

1

1 文章中に問いかけが出てきた場合は、その答えが何なのかに気をつけながら読み進めていこう。イの「文化や技術の一番いいところを見つけることができた」ということは、文中に書かれていることではあるが、問いかけと結びつけてみると「外国の進んだ文化や技術を見つけたから自分の頭で考えなくなつた」となり、優れた技術の発見と自分の頭で考えることとの結びつきがはっきりしない。特に理由は結びつけて意味が通るかどうかを考えることが大切である。

2 I 外国のいいところを真似ることが効率的だと学んだ↓その結果↓結果だけ真似すれば事足りるという傾向が強くなった、という流れである。II 試験では早く正解に到達するひとが合格する↓まとめると↓受験のほとんどが優等生の選抜試験になっている、という流れである。III 受験のほとんどが優等生の選抜試験になっている↓優等生とは言っても↓記憶力の良い生徒である、という流れである。

3 線②の中に「ほかに」と書かれていることから、前後が並列になっていることが示されている。線②の前では外国の真似をすることで国を発展させたことから創造性を育む努力がなされなかったと書いてあり、線②の後ろでは外国からだけでなく、過去の例からも真似をするようになったことが書かれていた。これを問いの文に合わせると、I には線②の後の内容を、II には創造性を育む努力がなされなかったことを説明するような内容が入ることになる。指定の条件に合わせて探していこう。

4 明治維新以降の日本の教育において何が重視されたかは、線③の後からくり返し「暗記」や「記憶」ということばが出ているので「記憶力」であることがわかるだろう。「記憶力」が重視されるために軽視されているものは、本文中でこの「記憶力」と対比される形で書かれていた「創造性」であると考えられる。

5 問4と同じく、この「考える力」も「記憶力」と対比的にとらえられているものである。「記憶力」と対比されるものについて筆者がどうとらえているかをつかむには、同じく対比的に書かれている「創造性」や「体験的知識」について説明されている部分もヒントとしてとらえていこう。

6 このような連続する空らんにとつひとつあてはめていく問題が苦手な人もいるかもしれないが、今回は暗記で身につくのが「表面的知識」で身をもって学んだものが「体験的知識」であることをおさえれば、「暗記した：⑤」と「暗記した：⑥」となっている⑤と⑥は「表面的知識」が入る。⑦は⑤や⑥と対比して書かれているので「体験的知識」が入る。

7 線⑧のすぐ前に「暗記中心の教育に興味を持ってず」とあるので、ここが線⑧の理由にあたることがわかる。しかし、「興味を持ってない」や「疑問を持っている」ことと、「先生に舌を出す(かげでばかにする)」ことが直接つながらないので、「ばかにする」ことにつながるマイナスの要素も書き入れよう。

8 暗記中心の学校教育では教わらないことであることから、これも現在の教育が重視する「暗記」や「記憶力」と対比されていることからであると見当がつけられる。

9 A 「重視」の対義語であるので「軽視」である。対義語としてこの組み合わせを知らなくても、「重」の反対であることや線Aの前後の流れから推測できただろう。B 「アウト」と「イン」が、「外」と「内」で対義となっている。C 「自分」と対義であるので「自分ではない人」を表すことばである。

10 a 「極東」はあまり使われることばではなく、難しかったであろう。日本がユーラシア大陸の東のはしっこであることから「極東」という。b 「先進国」は経済的に発展している国々のことである。しんによるの形に気をつけよう。c 「大半」は「半」のまん中のたて画をしつかり上につきでるように書こう。

2

1 a 「遠方」は「遠くの方」という意味である。聞きなれないことばでも、意味から字を考えていこう。b 「風景」は「風」の中のところがつぶれたり続け字になったりしないように気をつけよう。c 「名案」は「明暗」のような同音異義語と取りちがえてはいけない。2 それぞれ問いに書いてある意味である。普段から知らないことばやさつと意味が出てこないことばに敏感になって、自信のないものはすぐ調べていくようにしよう。

3 「俺」の人がらや青年との関係が普通とはちがうことは読み始めてすぐに気づいただろう。このような展開になったときは、なんとなく読まずに、不思議に思ったことをきちんと頭にとめておいて、なぞときをするような感覚で読み進めたい。

4 本来は深刻になつてもおかしくない親子の出会いの中で、青年が軽口をたたいているところである。口は悪いが一方的に父親をせめているわけでもないことから、イの「うらんでおり」はあてはまらない。アの「父親の生い立ちを知りたいという好奇心」も話があつたりと終わっていることから不適当である。エは青年が「覚悟」を決めたような深刻な様子ではないのであやまりである。

5 親や息子と何がつながっているか、である。「血のつながり」ということばになじみがなくても、「つながり」ということばに注目すると、十行後の「つながっているのが血だけでは」が見つかるだろう。あきらめずに探していこう。

6 ④の後に「俺がしてみたいにさ」とあることと、二行後の「毎月送られてきたら怖いだろう」がヒントである。登場人物の人となりを表すことばは問いとは関係なく通読時におききたいことばである。今回のようにはつきりことばで書かれている場合は読みながら印象づけをしたところであるし、苦手な場合は線などの印を使って強調させておきたい。

8 イの「くせに」は、非難や反発の気持ちをこめて「くせに」と言いたいときに使うことばである。また、「オの「耳障りな」は、聞いていて不快に感じるという意味のことばであり、どちらもよくない印象を表すことばである。

9 父親の「俺」の考えはまちがっていることに気をつけよう。青年のことばから「注文」や「ゆっくり」につながることを拾いあげて、まとめていこう。

10 四行後にある「うっかりスタバにく戸惑ってるんだよ」が「おどおどして」いる理由であるが、ここでは「連続した三文」の条件に合わない。冒頭で父親の「俺」も店の雰囲気は圧倒されて、注文時におろおろしていたことが結びつけば、そのときの「俺」の考えが「おばあさん」が「おどおどして」いる理由と同じであろうと推測できる。

以上